

保育士の仕事と家庭

Works and Families of Nursery School Teachers

永井 広克
NAGAI Hirokatsu

1. はじめに

今やキャリアウーマンという言葉も使い古された感があり、女性が一生を通じて働くことは当たり前となっている。女性のライフコースを家庭優先型、育児優先型、両立型の3つに分ければ、仕事継続型を理想とする人が増えている。結婚と同時に家庭に入る家庭優先型や子どもが産まれたら仕事をやめる育児優先型よりも、結婚・出産しても仕事を続ける両立型を理想とする女性が増えている。⁽¹⁾

しかし、女性が仕事と家庭を両立させることは大変である。「男は仕事、女は家庭」という性別役割が重くのしかかり、女性は仕事をしていても、家事・子育てをおろそかにできない。「男は仕事、女は家庭に仕事」という新しい性別役割となり、女性は二重の負担にあえぐことになる。そのために両立型が理想であっても、現実には育児優先型になり、子どもに手がかからなくなる30代半ばから再び仕事につく女性が多い。その場合はほとんどがパート就労を選ぶ。家事や子どもの世話にさしつかえない短時間労働を好むだけでなく、中高年の女性にはフルタイム就労の道はほとんど閉ざされているからである。休職側も求人側も中高年のパート就労を希望しているのである。

けれど結婚生活に関する女性の満足度を調べると、自営業の妻が一番高く、次いで専業主婦とフルタイムの妻がほぼ同じ割合で続き、パートの妻が一番低い。⁽²⁾ 専業主婦の結婚満足度が高いのはかつて「三食昼寝付き」と揶揄されたように、生活のために妻があくせく働く必要がなく、自由な時間が持てるからだが、自営業にしろ、フルタイムにしろ、仕事と家庭の両立に苦労するとはいえ、仕事をしない経済力がある妻が、パートの妻よりは結婚満足度が高い。経済的に自立し、仕事にも生きがいを見出だすことが、結婚生活にも良い影響を及ぼしているのである。逆に、たんに家計補助的な仕事では、ストレスがたまり肉体的な疲労感も増し、かえって家庭生活に悪い影響を及ぼすことにもなりかねない。

それではどういう仕事を女性は好んだのであろうか？ 1960年前後を境にし、それ以前の理容師やバスの車掌、デパートの店員といった職種に替わり、保母、看護婦、教員が女性の3大人気職業となる。子どもや病人、生徒に対する世話や思いやり、気配りといった女らしさが、それらの仕事にふさわしいと考えられと共に、資格が必要で、身分は公務員が多いことから、普通のOLに比べ、結婚や出産の後も、仕事を継続できる可能性が強いからである。女向きで、仕事と家庭の両立がしやすい職業とみなされているのである。

そこで本稿では、保育士⁽³⁾を取り上げ、具体的にどのように彼女たちが仕事と家庭を両立させているか、郵送によるアンケート調査によって探ることにした。県内の保育士956名に質問用紙を郵送した。⁽⁴⁾ その結果531通の回答を得た。調査年月は2000年11月から12月末まで、回収率は55.5%である。

2. 仕事

表1 保育士になった動機(複数回答)

***P<0.001

子どもが好き	女性向き	家庭と両立	親が勧めた	女性が多い	安定	一生働ける
368人*** 69.3%	47人*** 8.9%	28人*** 5.3%	66人 12.4%	4人 0.8%	88人 16.6%	154人*** 29.0%

保育士になった動機は、「子どもが好きだから」が圧倒的に多い。あらゆる仕事に言えることだが、好きであることがやりがいにもつながる。保育士は幼い子どもの世話をする仕事だが、いろいろ大変なこともあり、何よりも子どもが好きでなければ勤まらない。保育士はいろいろな職業の中でも、女向きの職業と見られており、本人も子ども好きを自負して、この仕事を選んだのである。

次いで「女が一生働ける仕事だから」となる。女向きの仕事で、資格があるので結婚・出産しても退職を強いられることなく、家庭と両立しやすいのである。

その次に「身分は公務員で安定しているから」がくる。私立の保育所もあり、すべてが公立ではないが、保育所の大部分は市立か町立なので、身分は公務員となり、給料はそれほど多くないが、堅実で安定しており、残業なども少なく労働条件も良いので、家事や育児と両立しやすと考えている。

職業の意味は、物質的側面として衣食住の糧を得たり、収入を得るための生計の維持。自己実現や能力発揮としての個性の発揮。社会的役割の実現ないし社会的機能分担の遂行としての連帯の実現である。⁽⁵⁾

「男は仕事、女は家庭」の性別役割に従えば、男は生計の維持、女は個性の発揮が他の意味に比べて強くなる。男は自分の食いぶちのみならず、妻子を養うために働かざるを得ないが、女は物質的な意味よりも精神的な意味を求めて、仕事に就くことが多い。そこで母性愛を発揮するために保育士という仕事に就くのである。さらに経済的に自立したいので、資格があり、公務員という強みがあるので、普通のOLのような腰掛けではなく、定年まで勤め上げることができる保育士を選んだのである。

「親が勧めたから」や「女性向きの仕事だから」がいくぶんみられる。親としては娘に生涯の仕事として保育士がふさわしいと考え、娘は積極的に保育士になりたいという気持ちを持たないが、親の勧めで保育士になったのである。親が勧めたのは、女性向きで一生働ける仕事という考えからであり、本人もそんな親の気持ちを汲んだのである。

「家庭と両立できる仕事だから」が意外に少ないが、これは「一生働ける」にその意味を含ませたからだし、保育士になった時は、結婚や出産はまだ先のことなので、仕事を継続するかどうかもわからないからである。「女性が多い職場だから」もほんの僅かであるが、女ばかりの職場だとかえって神経を使うこともあるからである。

表2 理想と現実のずれ(複数回答)

***P<0.001

きつい	人間関係	給料	かわいくない	その他
253人 47.6%	175人*** 33.0%	49人 9.2%	2人 0.4%	102人 19.2%

どんな職業でも多かれ少なかれ理想と現実のずれがある。子どもが好きで保育士になったものの、学生時代に思い描いていた仕事と現実の仕事は、多かれ少なかれ「違う」が多い。その理由は、「仕事がきつい」と「職場の人間関係がむづかしい」が多い。

「仕事がきつい」というのは、端から見れば、幼い子ども相手の気楽な仕事と見られがちだが、生身の人間、それもわがままな乳幼児が相手だけに心身共に疲れる仕事である。おまけに子どもたちだけでなくその親との関係にも心を砕く。さらに保育だけでなく事務的な仕事もたくさんあり、家にそれを持ち帰ることもたびたびだと言う。

「職場の人間関係がむづかしい」は、あらゆる職場に言えることだが、他の職場と違うのは、保育所は女だけの職場だということである。女だけだと気楽な面もあるだろうが、反面、細かな気配りが要求され、うっとおしいこともある。「給料が安い」が少ないが、「男は仕事、女は家庭」の性別役割に従い、妻が仕事を持っていても、あくまで一家の経済的な大黒柱は夫であり、妻の稼ぎがそれほど当てにされていない。また富山県の給与水準からみれば、公務員としての保育士の給料は決して安いとは言えないことによる。

通勤時間は「30分以内」がほとんどである。各市町村にいくつも保育所があり、自宅から近いのである。一般の勤労者の場合も、富山県内各地に事業所があり、通勤時間は1時間以内が大半で30分以内も少なくないと思われるが、保育士にもそれが当てはまる。

本調査の質問項目の大半が既婚者向きであることから、独身者の回答は1割にすぎないが、彼女たちの結婚願望は程度の差こそあれ、「ある」が大半である。結婚年齢が上昇し、結婚離れが叫ばれていても、子どもが好きで保育士になった彼女たちは結婚を夢見ている。それでは、結婚したら仕事を続けるかどうかは「今は何とも言えない」は半数近い。「女が一生を通じて働ける」ので選んだ仕事だが、意外に仕事がきついので、結婚して仕事と家庭の両立ができるか自信がない、ということである。

残り半分は「ずっと続ける」が32.8%、「結婚したらすぐやめる」が10.3%、「出産したらやめる」が8.6%である。たしかに仕事継続型が多いが、結婚退職型と出産退職型も幾分見られる。仕事と家庭の両立はできそうもないし、保育士になったのも「子どもが好き」だからという母性愛が強い人が多かったのも、仕事よりも家庭に生きがいを見出そうとしている。

3. 家庭

家庭と仕事の両立が難しいのは、子育てに四苦八苦するからである。子どもの数は「2人」が74.0%に達し、年齢は上の子は「21才以上」が45.6%、「16才～20才」が18.6%、下の子は「21才以上」が27.9%、「16才～20才」が23.0%である。

上の子も下の子も大学生か高校生の年齢が多いが、これは回答者の年齢が「45才～50才」が31.6%、「51才～54才」が18.3%、「40才～44才」が18.8%で、中年が多いためである。逆に、一番手がかかる乳幼児をいま育てている人は1割に満たない。県内の保育士の平均年齢はかなり高いのかもしれないが、本調査に回答を寄せたのは、子育てが完了した40代後半以上が多いせいもある。

表3 育児休暇と年齢

1%水準で有意

	25～29才	30～34才	35～39才	40～44才	45～50才	51～54才	55才～	計
産休のみ		5人 1.2%	7人 1.6%	61人 14.3%	137人 32.1%	82人 19.2%	33人 7.7%	325人 76.1%
育児休暇も取得	9人 2.1%	16人 3.7%	11人 2.6%	36人 8.4%	24人 5.6%	6人 1.4%		102人 23.9%
計	9人 2.1%	21人 4.9%	18人 4.2%	97人 22.7%	161人 37.7%	88人 20.6%	33人 7.7%	427人 100%

子どもが乳児の間は、育児休暇が強い味方になる。「産休だけ取り、育児休暇は取らなかった」が76.1%、「育児休暇も取った」が23.9%である。

出産休暇を含めた育児休暇の期間は、「9ヵ月～1年未満」が34.1%、「3ヵ月～6ヵ月未満」が23.0%、「3ヵ月未満」が19.0%、「6ヵ月～9ヵ月」が12.7%、「1年以上」が11.1%である。

産休だけ取った人が8割近くに達し、育児休暇を取得した人は2割余りにすぎない。また育児休暇は子ども

が満1才になるまで認められているが、1年間めいっぱい取った人はそれほど多くなく、1年未満が多い。産休に加え育児休暇を幾分とった感じである。育児休暇中は無給で経済的に苦しいし、余り長い間休むと同僚に迷惑がかかる。それで自分の子どもを義母や実母に世話をしてもらったり、他の保育園の乳幼児保育に預けて、仕事に復帰するのである。しかし、1年以上取った人が1割余り見られる。

育児休暇を取った人を年齢別に見ると、「40才～44才」が8.4%、「45才～50才」が5.6%、「30才～34才」が3.7%である。産休のみの方は「45才～50才」が32.1%、「51才～54才」が19.2%、「40才～44才」が14.3%である。

1976年に保母、教員、看護婦などの一部の女子公務員に旧育児休業法が法制化している。1991年に男女双方に適用される新しい育児休業法が成立し、1992年から施行された。さらに30人以下の事業所に対する猶予期間が終わり、1995年にすべての事業所に適用されるようになった。⁽⁶⁾

自由記述に「育児休業という制度がなく、産休だけであわただしく職場に復帰した。それに比べて、育児休業制度があるので今の若い人は恵まれている」という回答もあるように、年齢が若くなるにつれて取得率が高くなる。

表4 夫の育児の助けと育児休暇

5%水準で有意

	大いに助ける	やや助ける	余り助けない	全然助けない	計
産休のみ	45人 10.6%	108人 25.4%	115人 27.1%	54人 12.8%	322人 75.9%
育児休暇も取得	27人 6.4%	40人 9.5%	27人 6.4%	8人 1.8%	102人 24.1%
計	72人 17.0%	148人 34.9%	142人 33.5%	62人 14.6%	424人 100%

夫の家事の助けと育児休暇の取得は関連がみられないが、夫の育児の助けは関連がある。夫が「助ける」場合、「助けない」場合に比べて育児休暇も相対的に取得している。育児を「大いに助ける」夫は妻の育児の苦勞も体で感じており、妻が育児休暇を取ることに理解を示すからである。

表5 夫の職業と育児の助け

5%水準で有意

	大いに助ける	やや助ける	余り助けない	全然助けない	計
会社員	31人 7.1%	65人 15.0%	79人 18.2%	27人 6.2%	202人 46.5%
公務員	33人 7.6%	54人 12.4%	27人 6.2%	16人 3.7%	130人 30.0%
団体職員	4人 0.9%	9人 2.1%	9人 2.1%	5人 1.2%	27人 6.2%
自営	3人 0.7%	14人 3.2%	12人 2.8%	8人 1.8%	37人 8.5%
教員	1人 0.2%	7人 1.6%	8人 1.8%	4人 0.9%	20人 4.1%
その他	1人 0.2%	7人 1.6%	8人 1.8%	4人 0.9%	20人 4.6%
計	73人 16.8%	156人 35.3%	143人 33.2%	64人 14.7%	434人 100%

夫の職業と育児の助けの関連をみると、会社員は比較的「助けない」となり、公務員が比較的「助ける」。会社員が余り助けないのは、仮に助ける気があっても、仕事に追われ、時間も体力もないからである。その点、

公務員は育児を手伝う時間が幾分ある。

公務員とやや似た傾向が見られるのは自営で、団体職員と教員は会社員と同様に助けられない傾向がある。

表6 育児休暇と家族数

5%水準で有意

	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	計
産休のみ	3人 0.7%	24人 5.6%	60人 14.0%	85人 19.9%	68人 15.9%	59人 13.8%	26人 6.0%	325人 76.1%
育児休暇も取得	1人 0.2%	2人 0.4%	18人 4.2%	17人 3.9%	20人 4.7%	24人 5.6%	20人 4.7%	102人 23.9%
計	4人 0.9%	26人 6.0%	78人 18.2%	102人 23.8%	88人 20.6%	83人 19.4%	46人 10.7%	427人 100%

家族数と育児休暇の関連をみると、産休のみは4人家族、育児休暇も取得したのは、6人家族が多い。4人家族を核家族、6人家族を拡大家族とすれば、核家族より拡大家族の方が育児休暇を取得する傾向がある。

表7 家事は誰が行なう、義母(実母)それとも本人

5%水準で有意

	主に本人	どちらかと言えば本人	どちらかと言えば義母(実母)	主に義母(実母)	計
産休のみ	141人 43.2%	52人 16.0%	53人 16.3%	14人 4.3%	260人 79.8%
育児休暇も取得	21人 6.4%	13人 4.0%	22人 6.7%	10人 3.1%	66人 20.2%
計	162人 50.0%	65人 19.9%	75人 23.0%	24人 7.4%	326人 100%

拡大家族の方が育児休暇の取得率が高いが、それでも「産休のみ」が8割に達し、「育児休暇も取得」した者は2割にすぎない。そこで育児休暇の取得者がどの程度、義母または実母との家事を分担しているかを調べると、産休のみの場合よりも、相対的に義母が家事を分担している。嫁が働くことに対し理解があり、なるべく家事と仕事の二重負担を軽減してやりたいという気持ちがうかがえる。その気持ちが育児休暇を取りやすくしている。反対に、産休のみであわただしく職場に復帰したのは、義母が余り家事を手伝ってくれず、ひとりで担っている場合が多い。但し、その場合、育児休業制度が成立する前に出産したり、義母や実母が年老いて主婦権を譲り受けたためもある。

4. おわりに

女性が仕事を継続する上で、一番足枷になるのが子育てである。仕事を継続するには産休に加えて育児休暇も取得し、それ以後は、日中、子どもの世話を誰かにしてもらうか、乳幼児保育所に預けなければならない。そこで本稿では育児休暇の取得の有無に焦点を当ててみた。

その結果、8割近くの回答者が、育児休暇を取得せず産休のみで職場に復帰していることがわかった。その場合、たいてい同居している義母や、近くに住む実家の母親が乳飲み子の世話をすることが多い。それらの親族の助けを借りることができない場合は、ベビーシッターや乳幼児保育所に預けることになる。

育児休暇を取得したのは2割に過ぎない。旧育児休業法が制定されてから4半世紀が過ぎたが、年齢が若くなるにつれて育児休業を取得する人が多くなり、その期間も長くなっている。制定された当初は余り利用されなかったようだが、年を経ることに定着していったことがわかる。

また家族形態では核家族よりも拡大家族の方が取得率が幾分高い。育児休暇中は無給となるが、拡大家族の場合は、夫の他に義父も働いているので、経済的な心配はする必要がなく、義母も子育ての苦労を味わっているため、彼女たちが育児休暇を取ることを勧めないまでも、反対はしないのである。

加えて、夫や義母が育児や家事を手伝ってくれる場合、そうでない場合よりも育児休暇の取得が相対的に多い。夫や義母が、彼女たちが子育てと仕事を両立することの困難さに理解があり、育児休暇を取ることに賛成するのである。

ある回答者は自由記述に次のように書いている。

「初めは自分の理想としていた保育観と現実にはギャップがあり、技術的にもついてゆけない所があって大変であったが、今は子どもを育てるといいう仕事を楽しみ、今まで思い描いていた保育が少しずつ実現できるようになって嬉しい。技術的な保育から心を育てる保育に時代が流れてきて、やりがいと充実感をもっている。まだまだ未熟だが、錦を織る仕事として、ひとつひとつ丁寧に保育してゆけるように努力したい。家庭にはストレスを持ち込む事が多く、自分でもわかっているが押さえられない時がある。夫が冷静に思いを受けとめてくれる事が助け舟となっているが、いつもそうとは限らず、自己コントロールが大切なこと、要をきちんと押さえることが必要で、全ては出来ないの、何が一番大切かと考えるようにしている。義母には不満はあるが、きちんと完ぺきに出来ない自分を認め、助けを感謝したり、言われた事をいちいち気にしないようにしている」

〈注〉

- (1) 井上輝子・江原由美子(編)『女性のデータブック 第3版』有斐閣 1999年 41頁.
- (2) 井上実(編)『おもしろ男女共生の社会学』学文社 1994年 114頁.
- (3) 1999年から、保母、保父双方表せるように保育士に名称が変更された。本稿では女性保育士を扱っている。本調査を実施した2000年には公立保育園に勤務する男性保育士は見当たらなかったが、2001年10月26日付けの北日本新聞に新湊市の作道保育園に4月から勤めた22才の男性保育士が紹介されている。
- (4) 2000年版の富山県市町村職員名簿を見て、公立保育園に勤務する女性保育士全員に質問紙を郵送した。但し、富山市、氷見市、砺波市は自宅住所が掲載されていないので除外した。
- (5) 安藤喜久雄(編)『若者のライフスタイル』学文社 1998年 96頁.
- (6) 森典子・上松由紀子・秋山憲治(編)『新版 おもしろ男女共生の社会学』学文社 1999年 178頁.

*以下は質問表と単純集計である。最後の自由記述には、大部分の回答者が詳細に感想を書き込んでくれたので、彼女たちの好意を無駄にしないために、来年度の紀要に「保育士の思い アンケート調査より」と題して報告する。

I 仕事についてお聞きします

問1 保育士になった動機は何ですか。次の中からいくつでも選んで下さい。

- | | | |
|-------------------------|----------------------|----------------------------|
| 1 子供が好きだから
69.3% | 2 女性向きの仕事だから
8.9% | 3 家庭と両立できる仕事だから
5.3% |
| 4 親が勧めたから
12.4% | 5 女性が多い職場だから
0.8% | 6 身分は公務員で安定しているから
16.6% |
| 7 女が一生働ける仕事だから
29.0% | 8 その他
13.7% | |

問2 学生時代に描いていた保育士の仕事と、現実の仕事は同じですか、それとも違っていませんか。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 1 全く同じ | 2 やや同じ | 3 やや違う | 4 全く違う |
| 4.7% | 24.1% | 51.2% | 18.3% |

[次の問3は、前問で 2 やや違う 3 全く違う とお答えの方に質問します]

問3 どのように違いますか。次の中からいくつでも選んで下さい。

- | | | |
|-------------|----------------|---------|
| 1 仕事がつい | 2 職場の人間関係が煩わしい | 3 給料が安い |
| 47.6% | 33.0% | 9.2% |
| 4 子供がかわいくない | 5 その他 | |
| 0.4% | 19.2% | |

問4 通勤時間はどれくらいですか。

- | | | | |
|---------|-------------|-------------|---------|
| 1 30分以内 | 2 30分～45分以内 | 3 45分～1時間以内 | 4 1時間以上 |
| 91.5% | 4.1% | 2.1% | 0.2% |

[次の問5と問6は独身の方にお聞きします]

問5 いま、結婚願望はありますか。

- | | | | |
|---------|--------|--------|--------|
| 1 大いにある | 2 少しある | 3 余りない | 4 全然ない |
| 35.7% | 46.4% | 14.3% | 3.6% |

問6 結婚したら、仕事を続けますか。

- | | | |
|--------------|------------|----------|
| 1 結婚したらすぐやめる | 2 出産したらやめる | 3 ずっと続ける |
| 10.3% | 8.6% | 32.8% |
| 4 今は何とも言えない | | |
| 48.3% | | |

II 家庭についてお聞きします

[以下の質問は結婚している方にお聞きします]

問7 お子さんは何人ですか。

- | | | | |
|-------|------|-------|------|
| 1 いない | 2 1人 | 3 2人 | 4 3人 |
| 4.5% | 7.7% | 74.0% | 1.1% |

[以下の問8から問13は、お子さんのいらっしゃる方にお聞きします]

問8 一番下のお子さんは何才ですか。

- | | | | | |
|---------|----------|-----------|-----------|---------|
| 1 0才～5才 | 2 6才～10才 | 3 11才～15才 | 4 16才～20才 | 5 21才以上 |
| 7.3% | 7.2% | 17.1% | 23.0% | 27.9% |

問9 一番上のお子さんは何才ですか。

- | | | | | |
|---------|----------|-----------|-----------|---------|
| 1 0才～5才 | 2 6才～10才 | 3 11才～15才 | 4 16才～20才 | 5 21才以上 |
| 3.0% | 3.2% | 8.9% | 18.6% | 45.6% |

問10 お子さんを出産されたとき、育児休暇を取りましたか。

- | | |
|----------------------|------------|
| 1 産休だけ取り、育児休暇は取らなかった | 2 育児休暇も取った |
| 76.1% | 23.9% |

[次の問11は前問で 2 育児休暇を取った にお答えの方にお聞きします]

問11 産休を含め育児休暇を何ヵ月取りましたか。

- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 1 3ヵ月未満 | 2 3ヵ月～6ヵ月未満 | 3 6ヵ月～9ヵ月未満 |
| 19.0% | 23.0% | 12.7% |
| 4 9ヵ月～1年未満 | 5 1年以上 | |
| 34.1% | 11.1% | |

問12 あなたのご主人は育児を手伝ってくれましたか(いますか)。

- | | | | |
|----------|---------|------------|-----------|
| 1 大いに手伝う | 2 やや手伝う | 3 あまり手伝わない | 4 全然手伝わない |
| 17.9% | 34.9% | 33.5% | 14.6% |

問13 お子さんの中で結婚された方はいますか。

- | | | |
|-------|-------|------|
| 1 いない | 2 1人 | 3 2人 |
| 66.3% | 11.5% | 3.6% |

問14 ご主人の職業は次のどれに当たりますか。

- | | | | | | |
|-------|-------|--------|------|------|----------|
| 1 会社員 | 2 公務員 | 3 団体職員 | 4 自営 | 5 教員 | 6 その他() |
| 46.5% | 30.0% | 6.2% | 8.5% | 4.1% | 4.6% |

[次の問15は義母(または実母)と同居されている方にお聞きします]

問15 家事は主にどちらが行ないますか。

- | | | |
|------------|---------------|------------------|
| 1 主にあなた | 2 どちらかと言えばあなた | 3 どちらかと言えば義母(実母) |
| 50.0% | 19.9% | 23.0% |
| 4 主に義母(実母) | | |
| 7.1% | | |

問16 あなたのご主人は家事を手伝ってくれますか。

- | | | | |
|----------|---------|-----------|-----------|
| 1 大いに手伝う | 2 やや手伝う | 3 余り手伝わない | 4 全然手伝わない |
| 9.0% | 30.9% | 34.3% | 25.7% |

[以下の質問は未婚、既婚を問わずお答え下さい]

問17 朝は何時に家を出られますか。

- | | | | |
|-------|----------|----------|--------|
| 1 7時前 | 2 7時～7時半 | 3 7時半～8時 | 4 8時過ぎ |
| 2.3% | 7.9% | 32.6% | 53.7% |

問18 夜は何時に帰宅されますか。

- | | | | |
|----------|----------|----------|--------|
| 1 5時半～6時 | 2 6時～6時半 | 3 6時半～7時 | 4 7時過ぎ |
| 23.9% | 45.6% | 18.3% | 9.0% |

問19 現在、あなたと一緒に住んでいる方は、あなたを含めて全部で何人ですか。

1	1人	2	2人	3	3人	4	4人	5	5人	6	6人	7	7人以上(人)
	0.9%		6.0%		18.2%		23.8%		20.5%		17.5%		9.4%

問20 あなたはどなたと一緒に住まいですか。次の中からすべてあげてください。

1	夫	2	義父	3	義母	4	実父	5	実母	6	息子	7	娘
	81.5%		25.4%		42.0%		22.8%		25.2%		47.6%		44.4%
8	息子の配偶者	9	娘の配偶者	10	孫	11	夫のきょうだい	12	自分のきょうだい				
	1.5%		0.6%		2.1%		2.6%		4.3%				
13	祖父	14	祖母	15	その他								
	3.2%		9.4%		0.6%								

問21 あなたは何才ですか。

1	20才～24才	2	25才～29才	3	30才～34才	4	35才～39才
	5.8%		8.9%		4.5%		3.6%
5	40才～44才	6	45才～50才	7	51才～54才	8	55才以上
	18.8%		31.6%		18.3%		7.0%

最後に、保育士という仕事に対する思いや、家庭と両立するために工夫されていることなど、ご自由にお書き下さい。

付記 本調査は2000年度富山第一銀行奨学財団の研究助成金を得て実施された。